プレスリリース　　2023 年 1 月 20 日

## 旅する展覧会～フランスの最果ての地、ブルターニュの知られざる美術史～

展覧会詳細が決定！

# 憧憬（しょうけい）の地　ブルターニュ

### モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷

## 国立西洋美術館（東京・上野公園）
## 2023 年 3 月 18 日（土）－ 6 月 11 日（日）

国立西洋美術館（東京・上野公園）は 2023 年 3 月 18 日（土）から 6 月 11 日（日）まで「憧憬の地 ブルターニュ ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」展を開催いたします。

フランス北西部、大西洋に突き出た半島を核とするブルターニュ地方は、古来より特異な歴史文化を紡いできました。断崖の連なる海岸や岩が覆う荒野、内陸部の深い森をはじめとする豊かな自然、各地に残された古代の巨石遺構や中近世のキリスト教モニュメント、そしてケルト系言語たる「ブルトン語」を話す人々の素朴で信心深い生活様式――このフランスの内なる「異郷」は、ロマン主義の時代を迎えると芸術家たちの注目を集め、美術の領域でも新たな画題を求める者たちがブルターニュを目指します。以来この地は流派や国籍を問わず幅広い画家を受け入れることとなり、19 世紀末にはポール・ゴーガンを取りまくポン＝タヴェン派やナビ派といった美術史上重要な画家グループの誕生を促しました。

【19～20 世紀前半のブルターニュ地方】

本展では、とりわけ多くの画家たちがブルターニュに惹きつけられた 19 世紀後半から 20 世紀はじめに着目し、この地の風景や風俗、歴史をモティーフとした作品を一堂に展覧することで、それぞれの画家たちがこの「異郷」になにを求め、見出したのかを探ります。

また、フランスを中心とする西洋画家のみならず、明治後期および大正期にかけて渡仏し、ブルターニュにまで足を延ばした日本出身画家たちの足跡と作品にも光をあてる、これまでにない試みとなります。

会場には国内の 30 か所を超える所蔵先と海外 2 館から集められた約 160 点の絵画や素描、版画、ポスター作品に加え、文学作品やガイドブック、画家旧蔵の絵葉書やトランクなどの関連資料も展示されます。この機会にブルターニュの各地を画家たちと一緒に旅してみませんか。

### 【見どころ】

**その1：西洋だけでなく日本の近代画家たちが捉えた「ブルターニュ」も併せて紹介**

**その2：30 か所を超える国内の所蔵先と海外美術館2館から珠玉の作品約 160 点を一同に展示**

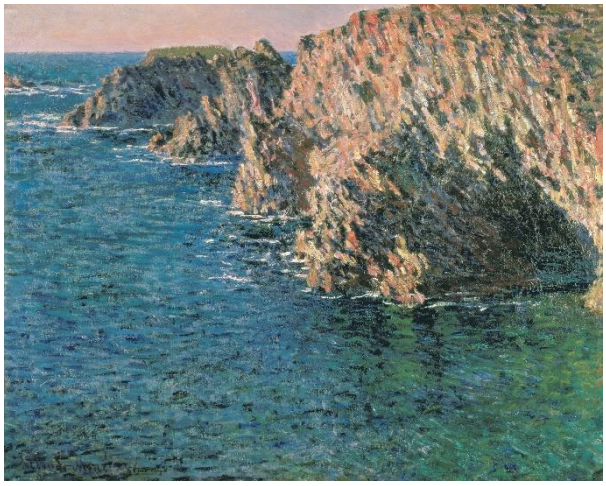
**その3：ブルターニュの名を美術史に刻印した画家、ゴーガンの作品 12 点が集結**

## 【展示構成】　会期中、一部作品の展示替えを行います。

### ［第 1 章］見出されたブルターニュ：異郷への旅

ブルターニュ地方が画家たちを惹きつけはじめたのは、19 世紀はじめのロマン主義の時代。第 1 章は、イギリスの風景画家ウィリアム・ターナーの水彩画やフランスの画家・版画家が手掛けた豪華挿絵本など、19 世紀初めの「ピクチャレスク・ツアー（絵になる風景を地方に探す旅）」を背景に生まれた作品から出発します。そして交通網の発達が旅を身近なものにした 19 世紀後半以降の版画作品やポスターを展覧しながら、時代とともに形成され、流布していくブルターニュのイメージを概観します。章の後半では、ウジェーヌ・ブーダンやクロード・モネら、旅する印象派世代の画家たちがとらえたブルターニュ各地の表情豊かな風景を前に、自然と向き合う画家たちの真摯なまなざしを感じ取ることができるでしょう。

（左）アルフォンス・ミュシャ 《岸壁のエリカの花》 1902 年 カラー・リトグラフ OGATA コレクション
（中）アルフォンス・ミュシャ 《砂丘のあざみ》 1902 年 カラー・リトグラフ OGATA コレクション
（右）ウィリアム・ターナー 《ナント》 1829 年 水彩 ブルターニュ大公城 ・ナント歴史博物館

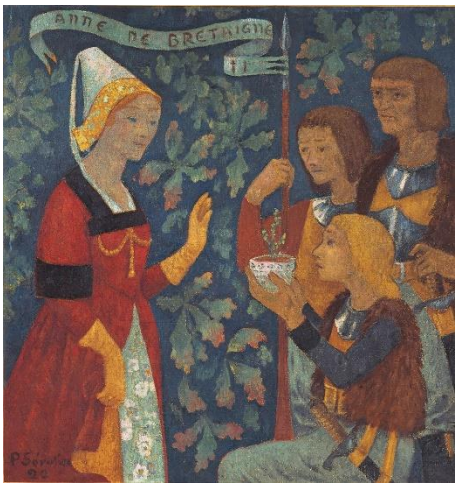


（左）クロード・モネ 《嵐のベリール》 1886 年 油彩／カンヴァス オルセー美術館（パリ）©RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Adrien Didierjean / distributed by AMF
（右）クロード・モネ 《ポール=ドモワの洞窟》 1886 年 油彩／カンヴァス 茨城県近代美術館

## ［第２章］風土にはぐくまれる感性：ゴーガン、ポン＝タヴェン派と土地の精神

ブルターニュ地方南西部の小村ポン＝タヴェンは画趣に富む風景、古い建造物や民族衣装を着た人々といった豊富なモティーフのみならず、滞在費やモデル代の安さも手伝って多くの画家を魅了し、早くも 1860 年代にはアメリカやイギリス、北欧出身画家たちのコロニーが形成されていました。
1886 年、パリでの生活苦から逃れるようにポン＝タヴェンへ赴いたゴーガンはこの地を気に入り、1894 年までブルターニュ滞在を繰り返して制作に取り組みます。この土地特有の風景や自然条件、人々の篤い信仰や素朴な生活様式に触れ、同地で画家仲間と交流・共同制作するなかで、彼は自らが芸術に求める「野性的なもの、原始的なもの」への思索を深めていきます。ゴーガンと彼をとりまくポン＝タヴェン派の画家たちは、単純化したフォルムと色彩を用いて現実の世界と内面的なイメージとを画面上で統合させる「綜合主義」を展開します。彼らの芸術思想は、1880 年代末にパリの画塾でナビ派が結成される引き金ともなりました。
第２章では、ゴーガンが度重なるブルターニュ滞在において制作した作品 12 点（絵画 10 点、版画 2 点）によって造形表現の変遷をたどるとともに、エミール・ベルナールやポール・セリュジエらポン＝タヴェン派の作品も併せてご覧いただくことで、実験的な創作活動の場としてのブルターニュをご覧いただきます。

（左）ポール・ゴーガン 《海辺に立つブルターニュの少女たち》 1889 年 油彩／カンヴァス
国立西洋美術館 松方コレクション
（右）ポール・ゴーガン 《ブルターニュの農婦たち》 1894 年 油彩／カンヴァス オルセー美術館（パリ）
©RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF




（左）エミール・ベルナール 《ポン＝タヴェンの市場》 1888 年 油彩／カンヴァス 岐阜県美術館
（右）ポール・セリュジエ 《ブルターニュのアンヌ女公への礼賛》 1922 年 油彩／カンヴァス ヤマザキマザック美術館
※展示は 5 月 7 日（日）まで

## ［第３章］土地に根を下ろす：ブルターニュを見つめ続けた画家たち

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけ、ブルターニュは保養地としても注目されるようになります。画家たちのなかにも避暑のみならず制作のため、パリやその近郊の住まいとブルターニュの往来の末に別荘を構えてこの地を「第二の故郷」とし、絶え間なくこの地を着想の源とした者がいました。第３章では、これらの画家が長期にわたる土地との対話のなかで培ったまなざしの行方を追います。

世紀末のジャポニスムを牽引した版画家アンリ・リヴィエールが描くブルターニュの穏やかな海、民衆が農作業にいそしむ牧歌的風景には、彼が夢見たであろうもうひとつの「異郷」たる日本のイメージが投影されているかのようです。篤い信仰に根差すブルターニュの精神に共鳴したナビ派の画家モーリス・ドニは、この地で過ごす家族の姿を宗教的文脈のうちに描き、またブルターニュの海岸を古代ギリシャの海に見立てるなど、現実と幻視が共存する地上の楽園のイメージを創出しました。

一方で「バンド・ノワール（黒の一団）」と呼ばれたシャルル・コッテやリュシアン・シモンらは、ブルターニュの伝統的あるいは現代的な風俗や自然を、それぞれ独自のレアリスムで描写しました。

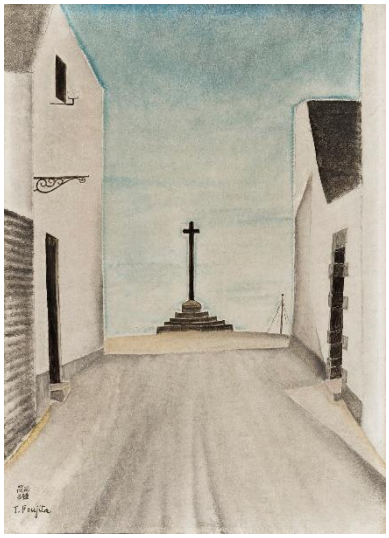
（左）モーリス・ドニ 《花飾りの船》 1921 年 油彩／カンヴァス 愛知県美術館
（右）シャルル・コッテ 《悲嘆、海の犠牲者》 1908-09 年 油彩／カンヴァス 国立西洋美術館 松方コレクション

（左）リュシアン・シモン 《ブルターニュの祭り》1919 年頃 油彩／カンヴァス　国立西洋美術館 松方コレクション
（右）アンリ・リヴィエール 連作「ブルターニュ風景」より：《ロネイ湾（ロギヴィ）》 1891 年 多色刷り木版 国立西洋美術館

## ［第 4 章］日本発、パリ経由、ブルターニュ行：日本出身画家たちのまなざし

ブルターニュ地方が西洋絵画の主題として定着し、多様な表現の受け皿となっていた 19 世紀末から 20 世紀のはじめ、つまり日本における明治後期から大正期にかけて、芸術先進都市パリに留学していた日本人画家・版画家たちもブルターニュという「異郷のなかの異郷」へ足を延ばし、その風景や風俗を画題に作品を制作していました。第 4 章では、これまであまり注目されてこなかった彼らのブルターニュ滞在に光をあてる新しい試みとして、黒田清輝や久米桂一郎を筆頭に、山本鼎や藤田嗣治、岡鹿之助らが描いたブルターニュの風景や風俗をご覧いただくとともに、彼らの同地での足跡をたどります。

（左）黒田清輝 《ブレハの少女》 1891 年 油彩／カンヴァス 石橋財団アーティゾン美術館
（右）山本鼎 《ブルトンヌ》 1920 年 多色木版 東京国立近代美術館
※展示は 5 月 7 日（日）まで



（左）藤田嗣治 《十字架の見える風景》 1920 年頃 油彩／カンヴァス 岐阜県美術館
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 E5054
（右）岡鹿之助 《信号台》 1926 年 油彩／カンヴァス 目黒区美術館

## ― 開催概要 ―

| 展覧会名　憧憬の地 ブルターニュ ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷

La Bretagne, source d'inspiration : regards de peintres français et japonais

| 会期　2023 年 3 月 18 日（土）－ 6 月 11 日（日）

| 開館時間　午前 9 時 30 分～午後 5 時 30 分（毎週金・土曜日は午後 8 時まで）

※入館は閉館の 30 分前まで

※5 月 1 日（月）、2 日（火）、3 日（水・祝）、4 日 （木・祝）は午後 8 時まで開館

| 休館日　月曜日 ※3 月 27 日（月）、5 月 1 日（月）を除く

| 会場　国立西洋美術館（東京・上野公園）　〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-7

| 主催　国立西洋美術館、TBS、読売新聞社

| 後援　在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、TBS ラジオ

| 協賛　大和ハウス工業、DNP 大日本印刷、損害保険ジャパン

| 協力　日本通運、西洋美術振興財団

| 展覧会公式サイト　https://bretagne2023.jp

| 展覧会公式 Twitter　@bretagne2023

| 観覧料金（税込）　一般 2,100 円　大学生 1,500 円　高校生 1,100 円　中学生以下無料

＊本展は新型コロナウイルス感染防止対策のため、日時指定制となります。事前に日時指定予約の上、来場ください。

＊会期期間中は国立西洋美術館券売窓口にて当日券をご購入いただけます 。
ご案内可能な直近の時間枠を販売いたします。ただし、来場時に予定枚数が終了している場合がございます。

＊無料入場対象の方は日時指定予約は不要です。直接会場へお越しください。ただし、会場内の混雑等によりご入場をお待ちいただく場合がございます。

＊中学生以下、心身に障害のある方及び付添者 1 名は無料（入館の際に学生証または年齢の確認できるもの、障害者手帳をご提示ください）

＊新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため本展では団体券の販売を行わないことといたしました。

＊国立美術館キャンパスメンバーズ加盟の大学等の学生・教職員は本展を学生 1,300 円、教職員 1,900 円でご覧いただけます。国立西洋美術館券売窓口にてお求めください。

| 本展関連プログラム/イベント　会期中は、様々な講演会・イベントが行われます。

| お問合せ　050-5541-8600（ハローダイヤル）

**本展の詳細、最新情報は展覧会公式サイトでご確認ください。**

**＜広報に関するお問い合わせ＞**

広報事務局（N&A 内）担当：鎌倉、進藤、藤村　Mail: bretagne2023-pr@nanjo.com

TEL 03-6261-5784 FAX 03-6369-3596　〒153-0051 東京都目黒区上目黒 1-11-6